
誰が為に愛を歌う

蒼葉 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が為に愛を歌つ

【Zコード】

N5174A

【作者名】

蒼葉 樹

【あらすじ】

誰かの為に歌いたい曲。その伝えたい相手を見つけ、幸せを手に入れる。

僕の歌
愛の歌

誰かに伝えたい、この想い…

誰が為に愛を歌う

僕の歌が、日本中に響き渡る。
音楽番組では、僕の曲が流れる。

「初登場、オリコン1位！！鹿嶋颯くん！」

鹿嶋 颯>かしま はやてく
そう。僕は、最近売れ出した歌手。

“誰かの為に歌いたい”
それが僕の、本当の想い。

誰かの為に歌う曲。それが、

「ONE FOR YOU」

僕の、セカンドシングル。
もちろん作詞作曲は自分でやった。
僕の気持ちを伝える為に…。

「颯の新曲聴いた?」

街中を歩く女子校生達。

この世の何処かに、僕だけの女性はいないのか。

「やっぱ良いよね!」

「…そんなの聞きたいんじゃないのに…」

いつか、僕だけの女性が現れる事。
いつでも願ってる…。

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

「未紅一、明日からのバイト代わってくれない?」

「えー。又お姉ちゃん彼氏と旅行?」

私の姉は、ライブスタッフのバイトをしている。

「まあね。でね、明日から3日間、鹿嶋颶のライブが有るのよ

「…別に興味ないんだけど」

「でも未紅、一つだけ好きなの有つたじやない?何だっけ、あれ」

そう。私は彼の曲で一つだけ好きなのが有る。

初めて聴いた時から、胸に響いてた曲。

「 ONE FOR YOU」

まるで、誰かに伝えたがっている様な、切ない曲だった。
この曲の時だけは、何だか彼の声も波長が良く聞こえて。

「じゃ、よひしくね

こうして私は今、バイトをしていく。

「バイトの皆さん、」¹⁾苦労様です!-

そろそろ昼食なのでお弁当ビーフを-

「はーい!有難う御座います!-

急いで残りを片付ける。

すると、聞き覚えのある曲が流れて来た。

『『ONE FOR YOU』だ……』

「こんな近くで聴けるなんて。そう喜んでいた。

「あれ…何か違わない…？」

今日のこの曲、胸に響かない。
どうして…どうやったの…？」

ライブも終わり、颯が出て来た。
私はツカツカと歩み寄る。

「あの！何なんですか、今日の曲。

『『ONE FOR YOU』』

「何か変だったか？」

彼はとぼける。

「がっかりです。何かこう、胸に響かなかつたんですね」

「ほう、お前に俺の曲が分かるのか？
面白え奴。後でちょっと来いよ」

それだけ言つと、颯はホールから出て行つた。

「お先に失礼します！」

会場を出て、家へと向かつ。

…？

誰かに腕を掴まれた。

振り向くと、そこにいたのは、ボロボロの服を着た男。

「待ちな。サッサと帰るんじゃねえ」

彼が被つていた帽子を脱ぐ。

その男は、颯だった。

「あんた、待ち伏せしてたの！？」

「そうだよ。やつを言つただろ？ま、いいや。来い

♪…何なの、こいつ…♪

「こんな街中でよく芸能人が歩いていられるわね！」

「大丈夫だろ。一応変装してるし」

クスクス… クスクス…

周りを見ると、たくさんの人々が鼻で笑う。

そんな人たちのことも気にしない颯。

少し歩くと、ギターを持って座っている人がいた。
足元にある楽譜は、颯の曲だった。

「なあなあ君、鹿嶋颯好きなのか？」

颯は一人駆け寄つて聞き込む。

「ああ、良いと思わないか？彼の曲」
「思ひ、思ひ。良いよな、ほんと」

うわ、自画自贊だよ。

「未紅、踊りつけ」

私の手を引き、無理やり躍らせる。
もう何がなんだか分からなくなつっていた。

颯が笑う。

そんな事も、嬉しく感じてしまつ。

そのうち、彼は自分の曲を歌い出してしまつた。

ザワザワ…

私達を見ていた通りすがりの人々がざわめき出す。

「ねえ、あれ颯じゃない！？」
「うそ！？」

「ヤバッ…」
「バカ！…ビうすんのよ」

演奏していた男も驚く。

「まさか、本物なのか！？」

「もう駄目だ。未紅、逃げるぞー！」

私達は走り出した。

危険なのに、なぜだか笑みがこぼれる。

「あははははっ」

「ふふふっ」

近くのホールに逃げ込んだ私達は笑い出してしまった。

観客席を見て、ふと思い出したように颯が口を開く。

「未紅、さっき俺の曲が変だつたって言ひたよな

「うん…」

「実は、図星指されて一瞬戸惑つた

「どういつうこと…？」

彼は自分の事を語り始めた。

「あの曲、誰かの為に歌いたかったんだ。

だけど、最近歌い過ぎて気持ちが込められなくなつて來た。

伝える相手がいれば良いんだけどな

ははつと苦笑いする彼が、とても悲しそうに見える。

「私ね、あの曲を初めて聴いた時、泣いちゃつたんだ。

感動したの。自分の気持ちと似てたから。

ねえ、あなたの言つ『伝える相手』、私どつっ。」

笑いながら私は言つ。

ふざけた様だつたが、本氣だつた。

「でもお前、俺のこと嫌つてそつだつたじゃん
「なんか自分でもよく分かんないんだけど、今日一緒にいて乐しか
つたの。」

あなた自身の「こととか分かつたし」

颯が観客席に目を向ける。

沈黙が訪れる。

「うん…。やうじょうかな

少しの沈黙の後、振り向きながら彼は言つ。

「お前、結構良い奴だし。俺も一緒にいて乐しかつたし
「結構」は余計でしょ！」

「ははっ。分かった。明日は俺、お前の為にあの曲歌つよ
「うん。楽しみにしてる」

* * * * *

「君はもう良い。帰つてくれ」

警備員が私を追い出そうとする。

「どうしてですか！？ 私バイトなんですねけど」

何を言つても、中には入れてくれない。

「何故かはあなた自身がよく分かつてははずよ」

振り向くと、颯のマネージャーが立っていた。

「昨日ホールであなた達を見かけた警備員がいたのよ。バイト代はちゃんと払わせるからあなたはもう来なくて良いわ」

「そんな……」

彼女はホールへ入つていった。

私はその場に座り込み、泣き続けた。

^.....!?

中のざわめきが聞こえてきた。

それと共に、彼の曲。

思い出す。あの胸に響く彼の曲。彼の声。
ちゃんと、届いてるよ。

「ZONE FOR YOU」

私は立ち上がり、勢い良く扉を開けた。

中にいた警備員を跳ね除け、会場へと急ぐ。

ステージに立つて歌う、颯の横顔が見えた。

「颯！！」

私に気付き、笑顔を向けて来る。

私は彼の元に駆け寄る。

彼は私を力一杯抱き締めてくれた。

その日のライブは、最高のものになった

。

END

(後書き)

なんかこの場で書き始めた普通のよつばくなつてしまこしました；
でも楽しんで読んで下さると嬉しいです (*^○^*)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5174a/>

誰が為に愛を歌う

2011年4月1日09時44分発行